

——今年も来れて良かった。

彼女が嬉しそうにべっこう飴を食べながら言う。飴の表面は露店や花火の明かりを鮮やかに受け止めていた。しかし内側はむしろ、足元の暗さをその小天地に収めていた。

——来年も来たいね。

彼氏はそう言つて川岸の雑草を軽く払い、座る準備をする。

露店にぶら下がった提灯は彼らの表皮を照らすと同時に、生い茂る雑草の葉をかるくなぞる。ピンクや白や黄色の花々は身を寄せ合っている、こじんまりと。土手の上には数多の人が夏祭りの熱狂に身を任せて歩いている。夏夜のそよ風。草は心地よい音をたて、土手の斜面に沿つて揺れる。少し遠くには煌びやかな橋。彼方には夜の帳に覆われた街が見え、いくつかの光が点々と宙に浮き、帳の表面を彩る。

ユキアネサ

就活もなんとか終わり、二人でここに來たことを彼は誇りに思った。早くから対策した甲斐があったというものだ。もちろん一人では成しえなかった。彼女が教えてくれたいくつかの就活サイト。資料。インターン募集。二人で泊まつて対策したこともあった。そうして彼女が呟いた「一緒ならずっと頑張れそう」という言葉を脳内で繰り返しながら奮起した——共に頑張ったのだ。功は奏した。彼氏は地方の有名企業に受かった。彼女は大企業に受かり上京することになったので今から準備を始める必要があった。入社のお祝いと、別れの思い出作り。その為に彼らは來たのだった。

ドーン。

大玉の花火が上がリ、男女の表層を共振させる。円形に広がり燦然と輝いたのも束の間、むなしく夜空を漂い消えていった。会話が盛り上がる。男は途端に、この花火を見る女の心情と自分の心情を比べ始めていた。この結果には満足している。でも女はもっと満足しているに違いない。比較した瞬間、男は女の成果と己の成果の微妙な違いを痛感し、不当にさえ思われてきた。同じぐらい頑張ったはずなのに。男の目はもはや花火を捉えておらず、深いところを見ていた。男は知らぬ間に窮地に——闇の中に——立たされていた。夜空の花が萎れていく。会話が止まる。こういう時、女は体を前後に揺らして次の話題を考えるのだが、それがとても遠くで揺れている提灯のように見えてきた。男は女に話しかけようと横目で見る。

男女は隔たれて座っているようだった、彼ら自身の深い選択によつて。

——東京の話をいろいろ聞かせてよ。それで、都合がつけばまた遊びに来てよ、と男は自分を安心させるために言った。

——うん……。でも仕事はかなり忙しくなるみたい。

——次はいつごろ会えそうかな？

——まだ分からないよ。

——なんなら一か月後とかは？

——うーん、仕事次第かなあ。

仕事、仕事。その言葉を聞くと男の表情が少し引

きつった。そうか。女が曖昧な返事をする裏が読めた。こゝやつて恋人面をする裏で、向こうに永住する決心をしているに違いない。

——仕事の考え事？

男は半ば焦りながら聞いた。

——いいえ、なんで？

——そんなふうに見えるからだよ。

——そう……。なんでもないので、気にしないで。

女は意固地になつて言った。

手ごたえがないので男の心はくじけた。遠距離からの破局という自然の成り行きと見せかけて、逃げていくように思えた。逃がしてなるものか——そう思った時、男はこれが初めてではないことを思い出した。休日に服をお互いに選んだ時。鎌倉に行つても、海が嫌いだからという女のために、大仏を見てきた時。若さにまかせて互いを求めた時——どれも最中は繋がっていると思えた——。男が深く見つめた時、夜の闇に独りで漂う魂が見えた。

ドン！ ドン！ ドン！ 立て続けに花火が上がる。

魂の焦りはいよいよ甚大——ドン！ ドン！ ドン！

花火の連射。魂のつぶて。男はびくつき、すぐるように

花火を見上げた。あれは何だ？ 魂だ！ 魂の姿か？

闇のおもてに儚く漂う——ドン！ ドン！ ドン！ は

っ！ なんだこれは？ すごい音だ！ 繋がりが音を立

てて崩れていく——そこには大きな間隙が口を開け、魂

はもう一つの魂に近づくことさえ出来なかった。いや、

一度だつて出来たことはなかったのだ。男は茫然とし、

蒼白になつた。体が細かく震えていた。

——仕事はほどほどにしようよ。俺たち新人に期待されるのは、活躍じゃなくて従属だよ。

男は敢えて傷つけることで自分の方に留めようと残酷に言った。それは精一杯の足掻きであつた。

——そんな言い方しなくてもいいじゃん。なんか冷たいね。

女は逃れようとしているように素早く顔を上げる。

男は花火の光を頼りに、恐る恐る女の顔を伺つた。動悸が激しく、息遣いが荒くなつていた。女も、こちらを一瞥した。女は目が合つると気まずそうに、「飽捨ててくる」と言つて素早く立ち上がり、そそくさと離れて行く。男は屈辱感でいっぱいだった。ひどい胸の痛みだ。ムカムカして立ち上がった時——大きな花火が上がつた。

ドーン！

憤慨した男の両目が、女の背中を睨んでいる。そして

魂は広大無辺の闇に立たされた。